巻頭言

若者たちが協同労働を担う人々と対話することの意味

安藤 聡彦（埼玉大学　教授）

ワーカーズコープの寄附講義を担当して４年目となる。埼玉事業本部がまだ北関東事業本部の一部だった2018年の初夏、「埼玉大学でもどうですか」と声をかけていただき、「ぜひやらせてください」と応じたのが始まりだった。

その声かけの半年ほど前の2017年11月、埼玉大学で教育研究者・大田堯さん（1918-2018）の「皆様とのお別れの機会」をもった。全国から駆けつけた400人近い「仲間たち」の前で、車椅子に乗った大田さんは、こう語ったのだった。

> *しかし、こんな社会の中でも、今私の前に玉木（信博）さんがお話くださった、あの労働者協同組合というのは、資本を自分たちでつくって、自分たちで新しい仕事を探し、新しい仕事を発見し、仕事のない人にそれを提供している。「雇われる」のではなく、自らの好みに応じて仕事をしている、労働している。労働をとおしての芸術性、人間になる。そういうことを目指しているグループもいるんですよ。そのほか、有機農業をなさり、生活を有機化しようと努力していらっしゃる方々もいます。ですから、私は悲観ばかりはしておりませんけれども、今、芽を出そうとしている労働者協同組合にしても、また有機農業にしても、我々の仲間たちが、これを助けていく、つないで支えていく。そして私ども自身のあいだでも身近な人間関係をつくるよう、挨拶を交わすことから励んでみる。そういう試みを毎日の生活の中に実現してみたらどうだろうか、と思うのです。*[1]*

この大田さんの問題提起をどう「実現」していけばいいのだろうと思って矢先にいただいたのが寄附講義開講の提案だった。やらない手はない、と思った。

私は、教育学部に所属し、環境教育や社会教育の研究に携わってきた人間である。だが、教育学部だけでお受けするのはもったいない。埼玉大学は、教養学部、経済学部、理学部、工学部、教育学部の５つの学部からなる総合大学。「働くこと」はすべての学生にかかわる問題である以上、学部の専門科目として位置付けるよりも、教養系の科目において誰でも

＊1 大田堯「あいさつ」https://doi.org/10.15083/00077282. なお、大田さんの生涯と思想について関係者で次のような本を刊行しました。機会があればお読み下さい。上野浩道・田嶋一編『大田堯の生涯と教育の探究』、東京大学出版会、2022年。

履修できるようにしたいほうがよい。ということで、「基盤科目」というどの学部の学生で取ることのできる科目群に位置付け、スタートすることにした。「地域と出会い、働くことを考える」というすてきな講義名は、ワーカーズコープさんのほうからご提案いただいたものである。内容については、藤谷英樹さんや小川勇気さん、それに協同総合研究所の相良孝雄さんや荒井絵理菜さんらと議論を重ねながらつくっていった。大きく言えば、この寄附講義もワーカーズコープさんの運動の一部としてある。そのことの意味はとても大きく重要なのだけれど、一方で自分自身のアイデンティティの模索途上にあり、しかも「社会」について多くの場合ほとんどリアルな認識や経験を持ち合わせていない学生たちが一気にたくさんの情報を提供されてしまうと、「与えられるものの過剰、獲得するものの過小」(大田堯)状況が生じてしまうことになる。ワーカーズコープさんのほうから提供していただく情報はできるだけコンパクトにしていただき、むしろ「働く」ことや「人との関わり」について、学生たちが思っていることをできるかぎり引き出し、対話を重ねることを大事にしていきたい、ということをお願いし、その線に沿って内容は決められていった。

大学における学生の協同労働探究と一口に言っても様々なありようが想定される。学部・大学院での専門講義(の一部)としてのそれもありうるし、卒業論文等の学術研究としてのそれもあるだろう。後者については近年徐々に事例が蓄積されているようで、本号にもその成果の一部が収録されるということで楽しみである。それに対して、私たちが取り組んできたことは教養教育の一環としての協同労働探究、より実態に即して言えば、協同労働との出会いづくり、ということになる。この4年間の経験に照らしてみれば、その出会いのなかで最も重要なのは「協同労働を担う人々との対話」なのだろうと思っている。協同労働を知る以前の学生たちの多くにとって、「働く」とは自己を押し殺して「社会」に適応することであり、それは徹頭徹尾「自己責任」が求められるプロセスである。それが事業本部や研究所の皆さん、そしてオンラインでやりとりしてくださる現場の皆さんとの語り合いのなかで、地域の困りごとに本気で向き合い、自分で考え、つながりをつくだしながら、働いている大人たちが実在していることをかれらは知ることになる。その経験が直ちにワーカーズコープに就職という展開に至るのではないにしても、「何のために働くのか」、「誰とどう働くのか」ということを考えることが重要であり、それが自分自身と社会とのウェルビーイング実現にとって意義ある作業なのだということを彼らひとりひとりが実感することは小さくない出来事なのではないだろうか。

これからも、この寄附講義を通して、若者たちが協同労働を担う人々と対話する経験を広げ深めていきたいと願っている。